

第七回 予防接種についてのQ&A

最近、ワクチンの種類が増えました。正しい知識を持って、計画的に接種を受ける必要があります。詳しく説明すると、一冊の分厚い本が出来てしまいますから、まずは、よく問題になる身近なことから勉強しましょう。

Q1 かぜ症状がありますが、接種できますか？

A1

原則として、ワクチンは身体が健康な状態で受けるべきものです。一般的に日本では、「かぜの急性期は、ワクチン接種は避けるべき」と考えられています。

医学的には、「ワクチンの効果や安全性に問題が生ずる状態では、接種すべきでない」ということになります。どの程度のかぜ症状でリスクが高まるかについては、実際には議論のあるところです。

多くのワクチンをスケジュールに沿って受けるには、ある程度柔軟な考え方も必要です。ですから、かぜの回復期や、軽い症状で元気な様子なら、医師と相談したうえで接種を優先する場合があります。



Q2 体温が37.5℃では、ワクチンは中止ですか？

A2

日本の予防接種ガイドラインでは、「明らかな発熱」を37.5℃以上と定義しています。ですから、日本では原則として接種はできません。

ところが、この基準は国によって異なります。たとえば、米国では38.0℃以上を発熱と定義して、38.0℃未満なら、高めの体温でも積極的にワクチン接種をします。これは、高めの体温でも、ワクチンの効果や安全性に問題がないという医学的根拠に基づく判断だそうです。ですから結論として、医学的根拠に加えて、それぞれの国の予防接種ガイドライン、および社会的コンセンサス（共通の理解）や慣習に従って、総合的に判断されるべきと考えます。



Q3 病後の予防接種はいつから可能ですか？

A3

これについても、考え方は国によって異なります。純粋な医学的な根拠の他に、やはり安全性に対する社会的コンセンサスや、その国の予防接種ガイドラインに拠って判断されるべきものです。以下に主な疾患の目安を挙げます。

- ① 治癒後、おおむね1～2週間を目安とする：インフルエンザ、水痘、風疹、流行性耳下腺炎、突発性発疹、アデノウイルス、RSウイルス、マイコプラズマ、ロタウイルス、ノロウイルス
- ② 治癒後、おおむね4週間を目安とする：麻疹
- ③ 治療終了後、直ちに可：溶連菌感染症、中耳炎
- ④ 発熱が無く、全身状態が良好であれば可：軽い上気道炎や胃腸炎、ヘルパンギーナ、手足口病、りんご病など



Q4 ワクチンの効果は、接種後どのくらいで出ますか？

A4

「ワクチンの効果」については、抗体獲得、感染予防、発病予防、重症化の予防など、様々な評価方法があります。ここでは抗体獲得として説明します。

ワクチン接種後の抗体獲得は、一般に約6週間前後で得られます。生ワクチンでは強力に、不活化ワクチンでは穏やかに免疫誘導が起きます。ですから、生ワクチンは通常2回の接種（麻疹風疹、水痘ワクチンなど）、不活化ワクチンは数回の接種（ヒブ、肺炎球菌、四混ワクチンなど）が、基本スケジュールとなります。初回接種で得られた免疫を、2回目以降で強めます。

すなわち、①「接種直後からワクチンの効果が得られるわけではないこと」、②「スケジュールに沿って繰り返し接種することで、免疫を強め、維持していること」を理解して下さい。

ワクチンは、どんな場合でも完璧に病気を予防してくれるものではありません。しかし、医学の歴史のなかで人間の知恵が編み出した、たいへん優れた病気の予防方法であることは間違いありません。これからも、正しい知識を持って予防接種を受けて下さい。

予防接種についての最新の情報は、以下のホームページで見られます。

- ① 日本小児科学会 (<https://www.jpeds.or.jp/>)
- ② NPO 法人 VPD を知って子どもを守ろうの会 (<http://www.know-vpd.jp/>)

小児科部長 上田 大輔（最終更新日：2021.3.1）